

[参考資料②]

『51歳からの1人暮らし（一人の障がい者が世の中の常識と闘いながら生きてきた歴史）』

（杉原公裕）

（前略）私が産まれたのは1960年、現在の広島市佐伯区湯来町。体重は1850g、8カ月で出てきて、生まれてしばらくして40℃近くの高熱が続き、1歳になってもまだ寝たきりの状態でした。大きな病院で脳性麻痺と診断され、母は私をマッサージとか機能訓練に連れて行きました。母は、遠く離れた泊まり込みの施設で、身体に障がいのある子が広島県内全域から集まって来ているという若草園に私を入れようと思っていました。体験に行ったところ、私は泣き出して施設に入ることはなりませんでした。

そこで、廿日市の教育委員会とか小学校に入学を頼みに行くのですが、なかなか来てもいいとはいわれなかったのです。それでもあきらめず何回も何回も頼みに行きました。頼みに行くとき「授業はどうするんですか?」とか「給食はどうするんですか?」とか、そんなことを色々言われました。当時の私は一人では何もできない状態でしたからそこをついてくるようです。字が書けないと小学校に入学できないと言われてたものですから、母と一緒に字を書く練習をしました。当時、私は右手が麻痺して上手く動かなかったのですが、その右手で鉛筆を持ってその上から母親が手を持って書くという、そんな感じのことを毎日やっていました

その名前を練習して書いた紙を教育委員会に持って行って「この通り字が書けるようになりましたから、小学校に入れてください。」と頼みました。母親が「私がずっとついていますから入れてください」と言うと、「お母さんがそこまで言われるならいいでしょう。」ということになりました。その足で小学校に行って「教育委員会から許可が下りましたから入れてください。」と行って、やっと入学することが出来ました。それが入学式の前日でした。

2年生になると、母親はたびたび校長先生から「学校を替わるように。」といわれるようになり、母親は「子どもが喜んで学校に来ていますからこのまま来させてほしい。」といい返していましたが、土曜日の4時間目が終わって帰ろうとするときに校長先生に呼ばれ、昼ご飯も食べずに2時間ほど話をしたり、平日の放課後などにも何度もよばれたりすることが続き、母も私も疲れてきました。

春休みになって3年生からどうしようかという話になり、家族の間で若草園に替わったほうがいいのではないかという話になりかけました。大雨の日、私は這って外に出て「若草園に行くなら家出する!」と大泣きをしたのです。それでは仕方ないということで3年生も小学校に行くことになりました。

しかし、さらに何度も転校を迫られた3年生の1学期の終わりに、母親にこれ以上苦勞をさせるのは申し訳ないという気持ちや、若草園に入ってそこで訓練をして歩けるようになって戻ってくればいいじゃないかという気持ちもあり、かなり追いつめられていました。

若草園に入るといことは、親や家族と別れて生活するという事です。小学3年生の子どもが親と別れてまで行きたいと思うのでしょうか? 当時の私はそれほど追い詰められていたということです。自分ではどうすることも出来なかった悔しい思い出です。その悔しさは後になればなるほど大きくなっていきます。後に、この悔しさは私に「障がい児を普通学級へ」の運動へと駆り立てていくことになるのです。

今思い出しても、当時どうして若草園に行く決めてしまったのかととても悔しい気持ちになります。私はどんな理由があったにせよ、当時の小学校の私たち親子への対応は絶対に許すことはできません。いや、絶対に許してはいけないことだと思います。私たち親子がどれだけ辛い思いをしたか…先生たち

はそのことを分かっていません。このことは教育者は絶対にやってはいけないことです。このことを許してしまうと現在特別支援学校、特別支援学級などに障がいを持っている子どもを行かせようとする動きを正当化することになるからです。このことを私は生涯をかけて訴えていきたいと思います。

学校を替わることが私たち親子のためになるという考えもあったのかもしれませんが、仮にそうであったとしても本人の気持ちに逆らってまでやっていいというものではありません。それが、たとえ善意からであったとしてもやってはいけないことです。なぜなら、そのようなことをやってしまったら本人の心の中に後々いろいろなしこりを残してしまうことになるからです。では、本人が納得すればやっていいのかということですが、私はその場合でもやってはいけないと考えています。なぜなら、この場合でも本人にしこりを残してしまうことになるからです。また「納得の仕方」にも問題があると思っています。

障がい児は多くの場合、親や先生に気がつかったり周りの友達との関係が上手くいっていなかったり、その他いろいろな理由で本当の気持ちとは違うことを言う(あるいは言わされてしまう)ことが多いのです。私の場合も最終的には自分で決めたのですから、「本人が納得した」と後で言われることになったのです。

現在の人権の国際基準から言うと障がいのある子どもを地域の学校または学級から分けてしまうこと自体が差別にあたります。つまり、障がい者が健常者と同じ学校または学級で教育を受けることは、国際社会ではすでに常織となっているということです。(後略)